

Title	マルグリット・デュラスの68年五月革命： 『イエス、たぶん』、『アバン・サバナ・ダヴィッド』を中心に
Sub Title	Marguerite Duras et Mai 68 : le sens de la révolution dans Yes peut-être et Abahn Sabana David
Author	村石, 麻子(Muraishi, Asako)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.20, (2015.), p.17- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20151201-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルグリット・デュラスの 68 年五月革命 『イエス、たぶん』、『アバン・サバナ・ダヴィッド』を中心に

村石 麻子

「舗道の下には浜辺（« Sous les pavés la plage »）」、「不可能を要求せよ、現実主義者たれ（« Demandez l'impossible, soyez réaliste »）」——自由と解放と創造を希求する数々のスローガンの世界史に刻んだ 68 年五月革命。20 世紀最大規模の学生・市民運動として先進国諸国に旋風を巻き起こしたこの反体制運動は、大学自治を求める学生運動として幕を開け、ベトナム反戦を掲げる市民運動に、果ては当時の米ソ帝国支配を糾弾する世界的なイデオロギー運動へと発展していった。

第一次世界大戦が勃発した 1914 年に生まれ、20 世紀も終焉する 1996 年にその死を遂げた現代女流作家マルグリット・デュラスは、時代の申し子と言っても過言ではない。植民地独立闘争から共産主義革命までデュラスは、戦後一世を風靡したサルトルの「アンガジュマン (engagement)」とはまた別の形で政治参画の可能性を模索してきた。その彼女が 68 年を素通りすることがあろうか。

現に、大学紛争の現場に赴くだけでなく、盟友ディオニス・マスコロ、モーリス・ブランショとともに ORTF (Office de Radiodiffusion Télévision Française フランス放送協会) のボイコットに加わり、アンリ・トマとともにガリマール社占拠を試みるなどの現実的アクションを起こしている。またサルトルとともに毛沢東主義を掲げる左派新聞『人民の大義』の街頭販売を企て、作家学生行動委員会 (Comité d'Action Écrivains-Étudiants) の活動の一端として、研究会を通じての革命理論の再検討も行っている。

またデュラスの当時の作品にも彼女なりのコミットの痕跡を見ることができる。五月革命以前に発表された作品として『イエス、たぶん』、『シャ

が』、また『私に会いに来た男』などの戯曲¹、また 68 年後の小説に『破壊しにと彼女は言う』²、『アバン・サバナ・ダヴィッド』³があるが、政治色の濃い作品には当時の世界秩序が批判の対象となり、二大大国による覇権構造が暴き立てられている。

しかしその一方、デュラスの革命参画は政治的射程に限定されるのだろうか。体制批判に留まらない「詩的革命」とも呼ぶうる新しい革命のあり方を提出することが喫緊の課題であり、デュラスにとっての文学的使命ではなかったろうか。本稿では、『イエス、たぶん』と『アバン・サバナ・ダヴィッド』に絞りデュラスにとっての 68 年五月革命の諸相を分析し、作家が志向していた革命がいかなる性質のものであったか明らかにしていきたい。

作家学生行動委員会とは何か——その活動と理念なき理念

作家学生行動委員会 (Comité d'Action Écrivains-Étudiants) は、革命の起こった 5 月に発足し、ロベール・アンテルム、ディオニス・マスコロ、モーリス・ブランショ、ジャン・シュステール、ジョルジュ・セバグを中心に同年夏まで活動が続けられた。発足当日には 60 名ほどが臨席したが、翌日には 25 名に減り、メディアも姿を消した。というのは、ただひたすら革命に関するテキストの読み下しをする、解釈の提示とその批判を繰り返し、推敲に推敲を重ねひとつの共同文書を作成する、傍から見れば滑稽なまでの単調な作業を延々と続けていたからだ。この読書会、研究会、勉強会ならぬある種異様な委員会の活動を、多くの人が興味本位で覗いては会場を後にし、再び姿を見せることはなかった。

この委員会は解散後「作家学生行動委員会、一年を経て (« Un an après le Comité d'action écrivains-étudiants ») 」⁴というテキストを上梓しており、そ

¹ Marguerite Duras, *Théâtre II – Suzanna Andler – Des journées entières dans les arbres – Yes, peut-être – Le Shaga – Un homme est venu me voir*, Paris, Gallimard, 1968.

² Marguerite Duras, *Détruire dit-elle*, Paris, Editions de Minuit, 1969.

³ Marguerite Duras, *Abahn Sabana David*, Paris, Gallimard, 1970.

⁴ « Un an après le Comité d'action écrivains-étudiants », *Les Lettres modernes*, juin-

こにその活動の概要と理念——正確に言えば理念なき理念だが——を汲み取ることができる。この一種のマニフェストこそがデュラスの革命思想に多大なインパクトを与え、68年関連作品の理論的裏付けになっているものと考えられる。その概要を見ていきたい。

デュラスは戦後まもなく共産党に入党し、毎日曜日に機関紙『ユマニテ（« humanité »）』を売り歩き、道行く人を引きとめてはマルクスを説く熱心な党员だった。しかし党幹部との思想的衝突から、1950年、志半ばで脱党を迫られることとなった。デュラスにとって、スターリン化する旧ソ連と足並みを揃えるように独裁化する党幹部は、共産主義が掲げる高邁な理想への裏切りであった。このテキストの基調を成すのは、その忸怩たる思い、デュラスのみならず多くの知識人、作家たちの失望である。

デュラスたちが目指した共産主義は、パリ・サン＝ブノワ街の彼女たちのアパートを拠点に培われていった。強制収容所から奇跡的に帰還したデュラスの夫ロベール・アンテルムを精神的支柱に、彼を取り巻く友人たちが集まり、マルクスのみならず、ミシュレ、ヘミングウェイ、サン・ジュストなど様々なテキストを自由に読み合う。デュラスのもてなしの才とアルコールも手伝い議論が白熱する半ば非公式なこの文学サロンでは、何より各人の思想の自由、表現の自由が大前提になっていた。厳しい言論統制を被る党员もここでは自由に発言できた。こうして叛乱分子のアジトのような場所になっていったのかもしれない。誰一人として仲間の言動を力づくでねじ伏せることはなく、思想的カリスマたるアンテルムと同様であった⁵。

絶対的な思想的権威の不在——つまり彼らの思想の根幹にはアナーキズムがあり、あらゆる権力の批判がある。それは権力奪取ではなく権力自体の批判であり、自らも権力を断念するストイックな意思の表明である。それを証明するかの如く、この委員会のマニフェスト的テキストでは、「われわれ皆人民であり、何人も権力への意思を持ってはならない」と、特定の個人の

juillet 1968.

⁵ Laure Adler, *Marguerite Duras*, Paris, Gallimard, coll. « folio » 3417, 2000, p.358-384.

権力の濫用、特定のドグマの神聖化は本来の共産主義のあり方に反すると明記されている。

あらゆる権力の拒否はあらゆる組織の拒否と同意である。サン＝ブノワ街のサロンがそうであったように、この委員会もまた、入会も退会もなく会員規約は皆無だ。それは、組織化することで革命のエネルギーは奪われ、思想が元々備えていた力は失われるという彼らの考えによる。内輪のユートピアは恥ずべき馴れ合いにすぎず、不健全なイデオロギーの温床となる。その最たる例が形骸化し官僚主義に墮した共産党なのだ。徒党を組み派閥争いに血道を上げる、この人間の動物的な習性に身を任すことなく新たな共同体の可能性をいかに模索するかがこのテキストの焦点になっている。

それでは権力批判と組織批判の先にある革命はどんな方向性を持っていたのか。「革命は崇高な文化的行動である（« La Révolution est l'acte culturel suprême »）」——この端的な定義から読み取れるのは、あらゆる政治性を退けることだ。この「脱政治化（« dépolitisation »）」が、暴力に訴える革命でないことは言うまでもないが、委員会とはりわけ「文化的行為」の意味を履き違えないよう喚起している。毛沢東の言う文化大革命とはニュアンスが異なるし、「新左翼主義（« gauchisme »）」はレーニンの意味は全くない。「文化的行為」とは、政治思想・革命思想を称揚し流布するためのプロパガンダ文学の営為とは一線を画すと明記されている。革命戦士養成の目的であるあらゆる洗脳・扇動を正当化するセクト的な狂信・盲信は「文化革命」とは無縁であるというのが委員会の主たる主張である。

また非政治的な革命であるということはつまり、本質的に個の革命であるということだ。あらゆる権力の、またその下に張り巡らされるあらゆる組織の否定の上に成り立つ革命は、集団主義を退け、徹底的な個人主義を貫くことを前提としている。このマニフェストにおいても個人の意識レベルに留まる革命の「内在性（« immanence »）」が強調されている。

この資料からは作家学生行動委員会におけるデュラスのスタンスは詳らかではない。構成員の「匿名性」を重んじる政治団体の報告文書としてはごく自然なことかもしれない。一委員としての草分け的活動を通して、こうし

た独自の理念を自ら体現し、世に問う力になり得ると考えていたのではないか。またこうした思想が背景にあって、デュラスの 68 年関連作品は少なからず影響を受けている。なかでも政治色の濃い戯曲『イエス、たぶん』と小説『アバン・サバナ・ダヴィッド』を中心に、その革命思想がいかに作品に結実しているか次に検討していきたい。

『イエス、たぶん』——アメリカ帝国主義批判

戦後の冷戦構造の中でベトナム戦争は、北ベトナムに肩入れするソ連と、南ベトナムの後ろ盾となったアメリカの代理戦争でしかなかった。第三世界の小国を壊滅状態にしたうえ、多くの兵士を前線に送り多大な犠牲を出したアメリカの横暴に、世界が怒りをあらわにした。その「アメリカ帝国主義に終止符を打つ」⁶べく作者が上梓したのがこの『イエス、たぶん』であり、その政治的意図は明らかである。前作『水と森 (*Les eaux et les forêts*)』や『ラ・ミュージカ (*La Musica*)』でデュラスに見出された女優クレール・デリューカの依頼で脚本が書かれ、来たるべき五月革命を予感させる 68 年 1 月、パリのグラモン座で『シャガ語 (*Le Shaga*)』と併せて初演された。

舞台装置は、装飾を極限まで切り詰めた、殺伐とした剥き出しの砂漠である。これは「戦争屋の連中のための戦争用の砂漠」であり、まずは代理戦争に利用され荒廃したベトナム領を再現しているのだろう。それと同時に、サイエンス・フィクションの趣さえあるこの茫漠たる無人地帯は、今や陳腐になった核戦争の果てに広がる黙示録的世界をも想定しているのか。「あそこはただの砂漠だった。砂とパンパンって音ばかり。イエス。ねじれた鉄にひゅうひゅういう風の音、それで夕方が来て、朝が来る。そしてお互いにこんにちは、こんばんはと言い合うの」⁷。

そこに二人の女に引きずられて現れる兵士。無気力で倒れたまま微動だにせず女にもてあそばされる兵士は、不条理演劇からの借用か、ベケットの『ゴドーを待ちながら』で、綱に繋がれて登場し、奴隷のごとく操られるラッキ

⁶ Entretien avec Claude Sarraute, « La vie des mots », *Le Monde*, 6 janvier 1968, p.13.

⁷ Marguerite Duras, *Théâtre II*, *op.cit.*, p.182.

一を思い起こさせる。組織の歯車として搾取される人間の姿だろうか。自由主義経済の支配する現代社会に生きる我々自身の現身かもしれない。いずれにせよ尊厳を踏みにじられた人間の悲哀と苦渋が滲み出ている。

上着には「名誉」、臀部には「祖国」の書き込み、また星条旗など全身を愛国主義的なシンボルで覆い尽くされた兵士。「若いけれど、頭の中は老人」と女に揶揄されるこの兵士は、国家という「古い神」に奉仕する前世紀の人種である。ナショナリストの「主の祈り」は、見事なまでのパロディだ。国家の名の下に戦争という大量殺戮を正当化する神に捧げる祈りでは、一体どんな詩句が唱えられるのか。「天にまします我らの父よ、願わくは今日の糧を与えたまえ（*« Notre père qui êtes aux cieux, donnez-moi notre pain quotidien »*）」の有名な一節は、「天にましますわれらのゴッドよ、願わくは今日の配給を投げ落とし給え（*« Notre god qui êtes aux cieux, lancez-nous notre ration quotidien »*）」⁸に書き換えられる始末。しかし実際は今日の配給の代わりに天から降ってくるのは「釘」だと言う。何のための釘かは問うまでもない。何百、何千という戦場に送られた兵士と言う名のキリストを十字架に架ける釘だ。

アメリカ文化は、キリスト教文化を抜きにしては語れない。政教分離の原則がありながら、キリスト教右派を支持基盤にするブッシュ前大統領を引き合いに出すまでもなく、国家元首の演説に god が自然に出てくるお国柄である。そうしたアメリカの宗教的背景を鑑みれば、この作品に聖書のリファレンスがさりげなくちりばめてあるのは不思議ではない。「戦争用砂漠」を埋め尽くす蠅の群れは、出エジプト記のそれであろうし、また次のやりとりは、創世記の失樂園からの引用である。

B は男を指さして：もう一度再開しなけりゃならないと彼らは言ってるの。

A：イエス。始まり方が良くなかったのね。

B：何ですって？

⁸ *Ibid.*, p.173.

A: ぜんぶよ。(間) 最初の人が食べちゃいけないものを食べちゃったからね。その毒で殺られたと彼らは言ってるわ。

B、驚いて: あらまあ、何をおっしゃってるの? 何を食べたんですって?

A: へびだと言うのよ。へびが道徳を腐らせたんだって。

B: あらら、かわいそうね。(間) でもそれはおかしい話だとみんな思ってますよ。(腕を組む)。聞いています? みんなおかしいって思ってますよ。

A: イエス。⁹

合衆国の建国神話に、イギリス国教会から分離し「メイフラワー号」でアメリカ大陸に渡った清教徒、ピルグリム・ファザーズがいる。インディアンとの抗争に打ち勝ち、野生を手懐けることでエルドラドを築いた開拓民にとって、エデンの園から失楽園を経て約束の地へと流浪の民が導かれる聖書のシナリオはじっくり来る。しかし一方でそれを「面白おかしい話だね」と、デュラス演劇の女たちは一笑に付しており、作者がアメリカの建国神話を一蹴しているのがわかる。

その聖書を下敷きにした建国神話が揶揄されているのがわかるのが、次の一節だ。「アメリカのからくり」であるという「非歴史的燧石(すいせき) (《non historical silex》)」と呼ばれる「文字が刻んである石」がそれである。そこには「何も起こらなかった」という事実がひたすら羅列されているようだ。女が唱える「ナッシング、ナッシング」が空虚に響く舞台に、作者はアメリカという甚大なフィクションの構造を暴こうとしたのではないだろうか¹⁰。こうした聖書を媒体にしたデュラスのアメリカ批判は、70年出版の『アバン・サバナ・ダヴィッド』で再び展開されることになる。

⁹ *Ibid.*, p.180.

¹⁰ ただし注意を喚起したいのが、兵士の身体を覆う愛国的シンボルはアメリカの国旗だけでなく、レジオン・ドヌール勲章や共和国の雄鶏などフランスのナショナリズムを想起するものもあるということだ。つまり冷戦構造においてベトナム戦争に出兵するアメリカのみならず、当時アルジェリア独立戦争を長期化させていたド・ゴール大統領も批判の対象になっていることを記しておく。

『アバン・サバナ・ダヴィッド』——冷戦批判と終わらないユダヤ問題

前年の『破壊しに、と彼女は言う』に続き 1971 年に出版されたこの小説は、ジャン・ピエロが「政治寓話 (« fable politique »)」¹¹と呼んだように、政治へのリファレンスがここかしこに散りばめてある。

まずタイトルのエキゾチックな名前の並び——母音 a と子音 b の連続音が多いユダヤ名のせいだろうか——からは聖書の登場人物が浮かび上がる。アバンはアブラハム、サバナはその妻サラ、また休息日の「サバト」をも思い起こさせ、またダヴィッドはイスラエル王国三代国王ダヴィデ王が自然に思い当たる。

身も凍る極寒の地シュタッドで、ダヴィッドは危険分子を始末するべく「ユダヤ人の家 (« la maison des juifs »)」を訪れ、アバンの身柄を拘束する。そしてグランゴが来るのを待つともなく待っている。このシチュエーションは『ゴドーを待ちながら』の舞台設定を思い起こさせるが、グランゴは一体誰だろうか。ゴドー、ゴッド、「神」だろうか。グランゴは獰猛なゴリラになぞらえられ、人間の顔をした野獣の呈をなしており、慈愛に満ちた神からは程遠い。「死の原」の「犬たち」を飼い殺しにする、むしろ神の仮面をかぶった冷酷卑劣な独裁者である。

「シュタッドの商人たち」と取引があるこの暴君は、メキシコ人によるアメリカ人の蔑称が「グランゴ」であることを考えると、資本主義諸国を牛耳るアメリカの国家元首であると言える。しかしその一方、翌年制作された映画版『黄色い太陽 (*Jaune le Soleil*)』でグランゴがグランスキーというスラブ名に変わっていることを想起すれば、スターリンやブレジネフなどの旧ソ連の国家元首を指しているとも言えよう。つまりデュラスは、グランゴの表象を通じて当時の冷戦秩序を糾弾しているのである。

また「シュタッドの王子たち」と呼ばれる「死の原」の犬たちは、グランゴの命令で明け方になると近隣諸国に狩りに出て人を襲いに行くように訓練されている。これは西側であれば北大西洋条約機構、東側であればワルシャワ条約機構という軍事同盟によるそれぞれの陣営の属国との関係を示唆

¹¹ Jean Pierrot, *Marguerite Duras*, Paris, José Corti, 1987, p.279.

しているのだろう。そこからまた、米ソの二大大国による帝国支配を批判していることがわかる。

しかし焦点はやはり東側にある。なぜならこの小説の原題は、チェコスロバキアへのソ連の軍事介入という「プラハの春」の事件に想を得た『プラハの神々 (*Les dieux de Prague*)』であったからだ¹²。『イエス、たぶん』と同年に上梓された戯曲『私に会いに来た男 (*Un homme est venu me voir*)』では、異なる政治的命運を辿った盟友シュタイナーとマーカーの再会が描かれるが、共産黨員として猛進したマーカーに対し、志半ばで離党したシュタイナーの失望、挫折感に、デュラスのそれを重ね合わせることができる。イデオロギーの裏切りという苦い経験はのちの映画作品『トラック』¹³で昇華されることになるが、こうした68年周辺の作品は、その習作とも言えよう。

またこの作品の新しさは、戦後最大の懸案とも言うユダヤ人問題を視野に入れているところにある。サバナが「アウシュタッド(«Auschstadt»)」——アウシュヴィッツ (*Auschwitz*) と「町」「共同体」を意味するドイツ語「シュタッド (*Stadt*)」を組み合わせた造語であろう——出身であることを鑑みると、「ドイツのユダ国 («*Judée allemande*)」、「燃え盛るユダ («*Judée brûlée*)」は強制収容所のガス室を指していよう。のみならずグラグと呼ばれるスターリン政権下の収容所も想定されており、時空を超えて共通する歴史を一つに結ぶには、神話的表象に頼るのは都合がよいと作者は考えていたようだ。

「ユダヤの犬 («*les chiens les juifs*)」、「犬のアバン («*Abahn le juif*)」——繰り返されるこうした侮蔑的表現はユダヤ人差別主義者かと思紛うほどだが、これはひとえに、人々の記憶に封印されタブーとなったホロコーストの記憶を敢えて掘り起こし、未解決のユダヤ人問題に切り込む素地を準備するためだ。1967年当時の第三次中東戦争¹⁴のコンテクストも相俟って、

¹² Laure Adler, *Marguerite Duras, op.cit.*, p.643.

¹³ Marguerite Duras, *Le Camion*, Paris, Editions de Minuit, 1977.

¹⁴ 中東戦争は、西側諸国がイスラエルに、東側諸国がアラブ諸国に肩入れした冷戦下の代理戦争とも言えるが、イスラエルというユダヤ・キリスト教圏とパレ

『破壊しに、と彼女は言う』の作家シュタインをユダヤ人という設定にし、「我々はみなドイツ系ユダヤ人である」という半ばセンセーショナルな文言を言わせているのは、たとえ挑発的であれ不可避の問題に真っ向から向かい合うきっかけを作るためであろう。

しかしこのユダヤ人問題の偏重は、病的なファナティズムの温床ともなりうる。デュラスとしてその例外ではない。晩年のインタビューで、自らの価値観を 180 度転換させることになったホロコースト・ショックと言うべき体験について語った後、デュラスは次のように言っている。

ユダヤ人に近づくため、一体となるため。とても神秘的なことです。彼らの血と自分の血を混ぜ合わせたいという、浸透し合いたいという強烈な欲求。血と肉という、彼らが苦悩を被ったその場所で彼らと一体になりたい。ユダヤ人のふりをしたこともあって、後から怒鳴られたこともある、そんな権利はないと¹⁵。

非ユダヤ人デュラスによるユダヤ人偏愛、盲目的で過度の同一化は、誤解も多く、個人的なファンタズムに由来する、危険な神格化とも言えなくない。また罪悪感ゆえ親ユダヤ派であることを誇示する傾向は、サルトルをはじめ戦後の知識人・作家には珍しくないこともここで想起しておくべきだろう。

デュラスによる革命——「文化大革命」ならぬ詩的革命的革命の可能性

このように聖書のメタファーを駆使し当時の世界情勢を冷徹なまなざしで見据えているが、68 年周辺の作品の真の狙いは政治的射程に収束するものだったのだろうか。デュラスにとって五月革命は、反体制という政治的スタンスを表明することだけにあったのだろうか。もう一度「革命は崇高な文

スチナというイスラム教圏の領土問題を背景に持つことから、やはりまずは宗教戦争の色合いが強く、ユダヤ人性がよりクローズアップされるきっかけになったのではないだろうか。

¹⁵ Entretien avec Frédérique Lebelley, « Duras retrouvée », *Le Nouvel Observateur*, 24-30 mai 1990, p.63.

化的行動である（« La Révolution est l'acte culturel suprême »）」の意味を考えてみたい。むろんデュラスが思い描いていた革命はまず血で血を洗う革命ではない。それに加え、デュラスが共産党の御用詩人として目の敵にしていたアラゴンのように、いわゆる革命文学、革命を礼賛するプロパガンダ文学を志すことでもない。デュラスの革命が、サルトルの唱えるアンガジュマン文学とは真逆の方向性を持ち、文学の脱政治化（« dépolitisation »）にかかっていたことは先述した。

その視点から 68 年の作品群を読み直してみると、直截的な体制批判以外のねらいがあったことが見えてくる。それはまず 68 年関連作品の難解性・韜晦性のせいだ。なぜならもし政治的メッセージの発信が目的なら、明晰な言語で書かれるべきだからである。むしろ作品の焦点はほかにあり、政治的背景はそのきっかけでしかないのだろう。デュラスにとって「非政治的な」革命は、まず理性的・知性的言語の放棄に始まる¹⁶。どの作品でも、登場人物たちは饒舌と無口のアンバランス、空虚な独り言、コミュニケーションの挫折に見舞われている。その発話は通常の文脈から剥奪され、意味を失った剥き出しの言葉の不気味さに彼らは恐れ戦いている¹⁷。

非言語の領域に踏み込むとはつまり狂気にふれるということではないか。『破壊しにと彼女は言う』で作者が演出した革命は、「森」を破壊しながら大音響で前進する「音楽」であった。轟音を立てて倒壊する「森」が潜在意識・無意識を象徴しているとすれば、性的欲望の萌芽も作品のテーマの一つであり、「音楽」は官能性を象徴していよう。プログラムされた惰性的な思考回路を一度断ち切るには、エロスという暴力が必要なのだ。

『アバン・サバナ・ダヴィッド』に至っては、デュラス作品の最も難解な部類に入っており、近代的理知に極限まで挑戦した作品と言っていい。『狂

¹⁶ Christiane Blot-Labarrère, *Marguerite Duras*, Paris, Seuil, coll. « Les contemporains » 14, 1992, p.85.

¹⁷ インタビューでは電話応答の「もしもし」という言葉が、受話器なしで発語された場合の不自然さが例に挙げられている (Entretien avec Yvonne Baby, « La Folie me donne de l'espoir », *Le Monde*, 17 décembre 1969, p.23)。

気の歴史』を書いたフーコーも「再読に値する作品」「時代が求めていた作品」として絶賛している¹⁸。その最後は『破壊しに』と似た趣きで、強度のカオスを創り出している。夜明け前のグランゴの来訪とともに銃弾が無数に放たれ、それに対抗するように「死の原」の犬たちが吠え叫ぶ。この銃弾音と吠え声のフーガを縫うように、今度はダヴィッドの腹から鈍い不吉な笑い声が湧き上がる。

無秩序な動きがダヴィッドの身体を揺さぶり動かす。その顔は沈黙の中で歪む。ダヴィッドは笑っているのだ。

「ダヴィッドはわれわれのものだ！ダヴィッドはこちらに引き渡されねばならん！」

最初は遠慮がちに、いまだ流れている涙にまみれて、笑いがダヴィッドの身体から湧き上がってくる。笑いはしゃっくりの中でダヴィッドの身体から出てくる。犬たちはグランゴのヴァイオリンに合わせて吠えはじめる。

「ダヴィッド！」

ダヴィッドの笑いは形が目に見えるようになってきた。それが彼を息詰らせることはもはやない。ダヴィッドの全身が笑っている。

暗闇の中でもう一つの笑いが聞こえてきた。アバンが笑っている。ダヴィッドとアバンの笑いはユダヤ人の家の戸を突き抜ける。

「ダヴィッド、戻ってこい！」

ダヴィッドとアバンの混じりあった笑いは壁を突き抜け、シュタッドの夜を旋回し、死の原に広がっていく。 [...]

笑いがまた起こる、狂ったような、抑えがたい、子供ような笑いが。犬たちの叫びと混じり、笑いはその光で言説と秩序と意味とを叩きのめす。それは喜びの笑いである¹⁹。

¹⁸ Maurice Blanchot, Michel Foucault, « Lettres à Margueirte Duras », *Cahier de L'Herne : Marguerite Duras*, sous la direction de Bernard Alazet et Christiane Blot-Labarrère, Editions de L'Herne, 2005, n° 86.

¹⁹ Marguerite Duras, *Abahn Sabana David*, *op.cit.*, p.112-113.

この瘻癩的な可笑は、バフチンなら真実を「グロテスク」で表現する「カーニヴァル的」²⁰笑い、クンデラなら「万物の無意味さを開示する」懐疑の笑いと呼ぶだろう。「音楽」にしる「笑い」にしる強度の感情の発露、感性の表現によって意識下の世界を解き放ち、思考の転回を図ることがデュラスにとっての革命であり、その意味で意識レベルでの革命、内的革命であると言えるだろう。

旧来の思考との断絶は、新しい思考回路の獲得につながる。『イエス、たぶん』の女たちは新しい人類である。「無邪気で厚かましく、柔和で快活、辛辣さはなく、狡知はないが愛想もない、知性もないが愚鈍でもない、何の履歴も記憶もない」²¹「突然変異体」²²である。そんな彼女たちが「物質主義者の聖書（« La Bible matérialiste »）」を朗読するシーンは、デュラスの言霊思想、言祝ぎの思想と言おうか、語られたことは実現され、謳われたことは祝福されるという強い信念から出てきたものと言えよう。

A：（Bに示唆して）初めに拮がりのある運動する物質があった。

B：（自らの言葉をかみしめ、それらを繰り返しながら砂漠を眺める）初めに拮がりのある（間）運動する（間）物質があった。（間）イエス、イエス。

A：見えるもの、見えないもの。

B：（同じように）見えるもの（間、恐れ戦いて）見えないもの。

A：重みのある。

B：重みのある。（間、考えて）イエス。（間）何のためにあるの、この言葉たちは？

A：あとからやって来る子供たちのためよ。

²⁰ Mikhaïl Bakhtine, *François Rabelais et la culture populaire au Moyen Âge et sous la Renaissance*, Paris, Gallimard, 1982. バフチンが既存の教会権力を批判するルネサンス期のラブレール文学をカーニヴァル文学と定義したように、デュラスの68年文学は、20世紀の端境期にあって現代のカーニヴァル文学と言えよう。

²¹ Marguerite Duras, *Théâtre II*, *op.cit.*, p.163.

²² Entretien avec Pierre Dumayet, « Lu par Pierre Dumayet, commenté par Marguerite Duras : *Détruire dit-elle* », *Le Monde : supplément au numéro*, 5 avril 1969, p.2.

二人は遠ざかりながら、唯物論者の聖書の一節を繰り返す。黄昏の光のなかに男一人が残される。男はもう微動だにしない。²³

これは詩による歴史の更新、新しい世界の創造への祈りである。「われわれは未来の前史である。われわれはそのたゆみない努力だ（« *Nous sommes la préhistoire de l'avenir. Nous sommes cet effort* »）」と作家学生行動委員会のメンバーが力強く宣誓する時、革命は志向性であり、弛みない精神の努力を意味していることが分かる。つまり革命は、矛盾する言い方だが、意識下においていつも既に起こっているものだ。「革命は確かに起こった。五月の運動は革命だった。成就したことで、成就することですべてを変えた出来事の煌きと閃光の中で革命となったのだ」²⁴——文中何度か革命が確かに起こったことを事実確認するのは、内的革命ゆえである。客観的な史実として記述することが不可能なこの革命は、虚構によってしか再現しえない。この文学作品によってしか存在しえない革命はまさに、「詩」を意味するギリシャ語 *poiesis* の語源が「創造」であることを思えば、「詩的革命」と名付けうるものだろう。

このように見てくると、デュラスにとって 68 年の革命は、作家学生行動委員会の影響下、政治闘争を超えた、個人レベルで追及されるべき意識革命であったことがわかる。集団の歴史と言う大文字の *Histoire* ではなく、個人の物語という小文字の *histoire* において紡がれる革命である。

近年、歴史学、政治学、社会学などの人文・社会科学の諸分野で、68 年という、民主主義社会の危機が多方面で顕在化したこの「ヤヌスの出来事」²⁵ について、総括の作業が盛んに進められている。その中には否定的な見解も少なくない。「無責任な個人主義」の飽くなき追及を助長した結果、後世に致命傷を残したという論調、また 68 年を歴史の負の遺産として清算すべき

²³ Marguerite Duras, *Théâtre II*, *op.cit.*, p.182.

²⁴ « Un an après le Comité d'action écrivains-étudiants », *art.cit.*, p.164.

²⁵ Jean-François Sirinelli, *Mai 68 : L'événement Janus*, Paris, Fayard, 2008.

時に来ているという論調も多く見られる²⁶。小説家ミシェル・ウェルベックに至っては、性解放をはじめとする、68年が生んだ、行き過ぎたリベラリズムが現代にもたらした弊害を、ブラックユーモアを交えて虚構作品に仕立てている。

確かにデュラスの希求した「詩的革命」は、前世紀に二つの世界大戦の災禍を惹き起こした全体主義の反動として、個人主義を謳っている。しかし文学言語による思考の編み直しは、はたして自我の肥大という精神病理に還元されるものだろうか。内省から創作へと向かう忍耐を要する知的作業は、決して孤立と無関心とアパシーへと導くものではないだろう。むしろ言語という人類の共通項を介在させることで、やがて共同体へ回帰するための必要不可欠なステップとして捉えられているはずだ。

新左翼の革命が真の民主主義を模索する過程で道を誤ったことは否めない。その軌道修正の試みとして、正しく68年の遺産を後世に引き継ぐためにも今一度、歴史の読み直しを図るべき時が来ている。作家マルグリット・デュラスに倣い五月革命を「文化大革命」ならぬ「詩的革命」と捉えることで、過去の遺物ではない新たな革命理論を鑄直すきっかけになるのではないだろうか。

²⁶ *Liquider Mai 68 ?*, sous la direction de Chantal Delsol, Paris, Presses de la Renaissance, 2008.